

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①単元等や一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをする。この学習で「何(を学ぶか)が身に付いたか」を明確にした、子ども主役の学習を目指す。②重点研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」とし生活科総合的な学習の時間を中心に、理論研修や授業研究を通じた授業改善を進める。	①各学級で生活・総合の単元づくりを行い、子どもの思いや願いを実現できるような学習を行ってきたが資質能力を明確にした授業づくりに関してはさらに取り組んでいく必要がある。②生活科、総合的な学習の時間を中心に授業改善を行い、子どもが主体的な学習の時間を見られた。他教科にも学んだことを生かしている様子も見られた。	B
道徳教育	①道徳科や行事、異学年との交流を通して、他者とのつながりを大切に、他者を尊重する態度を養う。また、それらの活動の中で互いに認め合うことで自己肯定感、自己有用感を高めていけるようにする。②道徳科授業実践を保護者に伝える機会をもつ。③道徳科の諸価値について学習したことを生かすことができるよう、実生活との関連を図り、実践できるようにする。	①③異学年交流、全校遠足やなかよし集会などのなかよし班活動や工夫して行うことができた。それらの経験、道徳科の授業等を通して、他者を尊重する態度を養うと共に、自己肯定感、自己有用感を高めようとした。より実生活でも実践できるような支援を続けていくようにする必要がある。②道徳の授業公開を行い、道徳科の授業実践の様子を保護者に伝えることができた。	B
健康教育	①運動における自己の課題を明確にした授業改善を行ったり、家庭と連携を取ったりして、運動をする習慣を付けるようにする。②継続して運動に取り組んでいるよう、中休みの過ごし方や児童会発信のイベントを工夫する。③正しい知識と情報に基づいて、自分で自分の食を選択できる子を目指し、食育を推進する。	①各学級児童自ら課題を見出せるような授業改善を行ってきた。家庭との連携という点では工夫が必要。②児童会(体育委員会)が発起になった長縄は、休み時間に取り組む学級が増え、日常的な運動への取組につながってきている。③学級活動や総合的な学習の時間での取組がある一方、学校全体としての取組には課題が残る。	B
自分づくり教育(キャリア教育)	①教科等横断的な学習を意図的・計画的に行い、「人、こと、もの」とかかわる学びを通して、よりよい人間関係を形成する力を育成する。②地域の人的資源やROIノート等の情報機器の活用から、課題解決的なプロセスを通して、意思決定する力を育成する。③「自分づくり・パスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りして、自身の姿や成長を自己認知・自己評価できるようにする。	①「人、こと、もの」と関わる学びについては、重点研究を通して大きな一歩を進めることができた。会科的な学習計画は、今後の課題として取り組んでいきたい。②地域の人的資源の活用は少しずつ進んでおり、IoT活用も思考ツールの使用や、グループでの情報共有のときに用いられるようになってきている。③「自分づくり・パスポート」の活用については、自己評価にもっと生かしていく必要がある。	B
いじめへの対応	①日頃から、児童同士が適切な言葉遣いで関わり合うことができているか、児童同士が互いに関心をもって言葉かけをし合っているか、などに全教職員で注視し、いじめの未然防止に努めていく。②いじめが疑われる場合には、いじめ防止対策委員会を通して、迅速に適切な対応をし、解決していく。	①児童同士の関わりについて、全教職員で注視し、適切でない場合には指導を行った。②いじめが疑われる場合には、いじめ防止対策委員会を開設し、対応を行い、全教職員で見守りを行った。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員が児童の考えを生かす授業力、自己肯定感を高める児童指導の力の向上のため、中堅教員の講師の下、月1回のメンター研修を行う。②ミライム、SSD等を活用し、全職員による学校組織運営の継続可能な環境を整える。③「モデル事業」で、生み出された時間を「授業改善」「働き方改善」に活用する。	①年度初めに心配なことや課題に合わせて計画を立てた。その計画に沿って先輩教員を講師として研修を行った。日々の授業や指導に活かしたいという思いにつながった。②ツールを活用しいつでも「どこからでも」対話が生み出された時間を授業改善タイムや学校づくりワーキングなどに活用し、「働き方の改善」につなげた。	B
地域学校協働活動	①学校教育活動の充実、運営の改善に資する協議機関として、学校運営協議会を設置し、地域に開かれた信頼される学校づくりの実現を目指した協議を行う。②これまでの地域と連携した教育活動を、系統性と学校教育目標の実現を意識したカリキュラム・マネジメントに資する活動として捉え、継続発展させるとともに、目標やビジョンを地域と学校で共有した協働教育活動を実施する。	①学校運営協議会を設置し、開催することができた。地域に向け小学校での取り組みを紹介したり、地域での児童の様子を聴いたりして、情報交換を行った。②総合的な学習の時間を中心に、地域とつながる機会が増えた。子どもをどう育てるかという目標の共有を軸として、連携できたところからさらに広げていけるように、情報集約を行った。	B
情報教育	①ICT機器や図書館を活用し情報を集め、集めた情報を分析する力を身につけられるようにする。②情報機器の正しい使い方と情報モラルの必要性を理解した上で、適切に表現できるようにする。	①ICT機器や図書館を、場面に応じて選択して活用し情報を集められるようにし、集めた情報を分析する力を身につけられるようにしてきた。②情報機器の正しい使い方と情報モラルの必要性を理解した上で、情報を適切に表現できるようにしてきた。	B
特別支援教育	①配慮の必要な児童の情報を共有し、支援の手立てを講じ、外部機関との連携を図る。個別支援計画での引継ぎを行う。②学習に困り感のある児童や情緒面の安定の必要な児童に特別支援教室を行う。担当者、担任の連絡を密にする。③個別支援学級と交流級の担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行う。	①配慮の必要な児童の情報を全職員で共有し対応した。必要に応じてケース会議を行い外部機関に繋いだ。②きめ細かい支援のための特別支援教室を行った。ファイル等を通して担当者や担任の連絡を密に行い成果をあげた。③個別支援学級担任、交流級担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行った。	B
ブロック内評価後の気づき	4校ブロックでの協議会では、「9年間で育てる子ども像」や具体的な取組について見つめなおした。そして、子どもの成長を同じ視点から捉えることができた。また、各校の年間行事予定表をもとに行事を見合い、実施日の振りや授業参観の形式について情報共有を行った。授業参観も浜中学校と参観し合い、授業の進め方や児童生徒との向き合い方についてより理解を深めることができた。		
学校関係者評価	・子どもたちがとてもよく挨拶をする。 ・生活・総合を切り口としての授業改善では、「活動の質を高める」ことが大切。また、「本物」や「プロ」と出会わせてほしい。 ・学校評価のためのアンケート項目は、児童と保護者に共通項目がいくつかあると結果が広がる。また、学校からの情報発信は、保護者や地域の人たちの評価材料となる。 ・放課後の子どもたちの遊び方について注意喚起が必要。(学校はその声を受けて子どもたちに問題意識をもたせたと、子ども自身がポスターを作って呼びかけをした。)		
中期取組目標振り返り	学校教育目標「すすんで学び 笑顔かがやく さわの里～思いや願いをもち、つながる力を育てます～」の具現化に向け、地域、保護者と連携しながら「主体的に学ぶ子どもの育成」に取り組む。その中で「言語能力」と「自分づくりの力」を育て、1年間取り組んできた。取り組むことで「ほんとうの意味での子どもの主体的な学」や、さらなる地域や保護者との連携、思いの共有が必要であることが見てきた。学校からの発信力やカリキュラム・マネジメントの推進力を強め、さわの里の子どもに「よりよく生きていく力」をつけていきたい。		

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをする。この学習で「何(を学ぶか)が身に付いたか」を明確にした、子ども主役の学習を目指す。②重点研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」とし生活科総合的な学習の時間を中心に、理論研修や授業研究を通じた授業改善を進める。	①生活・総合を通して、子どもの思いを大切に、探究課題を明確にすることを意識した単元づくりを行った。今後は収集した情報をもつて整理分析し、さらに精密する力の育成の必要性がある。②研究副主題「伝え合う楽しさを実感できる単元づくり」を意識し、理論研修や授業研究を行った。伝え合う力を伸ばすために、豊かな聴き手が育つ手立てを深める必要がある。	B
道徳教育	①様々な活動を通して、他者とのつながりを大切に、他者を尊重する態度を養う。互いに認め合うことで自尊感情を高めていけるようにする。②道徳科授業実践を保護者に伝える機会をもつ。③道徳科の諸価値について学習したことを生かすことができるよう、実生活との関連を図り、実践できるようにする。	①③全校遠足やなかよし集会などのなかよし班活動を工夫して行うことができた。また、総合の学習などでも、異学年交流につながる場面があった。それらの経験を道徳科の授業等を通して、他者を尊重する態度を養うと共に、自己肯定感、自己有用感を高めようとした。②各クラス1回の道徳の授業公開を行い、道徳科の授業実践の様子を保護者に伝えることができた。	B
健康教育	①運動における自己のめあてを明確にした授業改善を行ったり、家庭と連携を取ったりして、健康への興味関心を高めるようにする。②継続して運動に取り組んでいるよう、中休みのイベントを工夫する。③正しい知識と情報に基づいて、自分で自分の食を選択できる子を目指し、食育を推進する。	①全体のめあてと自己のめあてを明確にした授業改善をおこなったり、体力テストの記録を家庭と共有したりしてきた。②体育委員会の企画の長縄に全校で取り組んだことで、体を動かす楽しさを感じ、外に出る児童が増えてきた。③給食委員会が主催する給食週間の中で取り組んだ。今後は、栄養教諭と連携を図って取り組んでいけるようにしたい。	B
自分づくり教育(キャリア教育)	①教科等横断的な学習を意図的・計画的に行い、「人、こと、もの」とかかわる学びを通して、よりよい人間関係を形成する力を育成する。②地域の資源を活用し、課題解決的なプロセスを通して意思決定する力を育成する。③「自分づくり・パスポート」を活用し、学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りして、自身の姿や成長を自己認知・自己評価できるようにする。	①学年・学級により、教科等を意図的に関連させているところもあるが、学習意欲を見通し、より計画的に行うこと、②地域の人的資源の活用をより効果的に行うことで、課題解決への意思決定につながる。③学習状況などの振り返りについては生かされているが、学期間や学年間のキャリア形成を意識した活用には課題がある。	B
いじめへの対応	①日頃から、児童同士が適切な言葉遣いで関わり合うことができているか、児童が互いに関心をもって言葉かけをし合っているか、などに全教職員で注視し、いじめの未然防止に努めていく。②いじめが疑われる場合には、いじめ防止対策委員会を開催し迅速に対応をして解決していく。	①日頃から児童の思いやりのある言動を全教職員で価値付け、温かな学級、学年、学校風土をつくり上げていくことを意識し、いじめの未然防止に努めた。②いじめが疑われる場合には、いじめ防止対策委員会を開き、組織的な対応を早期に行った。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員が児童の考えを生かす授業力や、児童指導の力の向上のため、中堅教員の講師の下、月1回のメンター研修を行う。②ミライム、SSD等を活用し、全職員による学校組織運営の持続可能な環境を整える。③「モデル事業」で、生み出された時間を「授業改善」「働き方改善」に活用する。	①互いの授業参観や実践指導、中学校ブロックでの合同メンター研修を通して、学校内外の方と交流しながら学びを深めた。先輩教員の授業や指導から学ぶ機会を増やしていきたい。	B
地域学校協働活動	①学校教育活動の充実、運営の改善に資する協議機関として、学校運営協議会を設置し、地域に開かれた信頼される学校づくりの実現を目指した協議を行う。②これまでの地域と連携した教育活動を、系統性と学校教育目標の実現を意識したカリキュラム・マネジメントに資する活動として捉え、継続発展させるとともに、目標やビジョンを地域と学校で共有した協働教育活動を実施する。	①学校運営協議会では、地域の学習材や地域での児童の様子、学校での取組を共有することで、身に付けたい力や児童のよさや課題を共有した。②総合的な学習の時間や生活科などで地域の「人、もの、こと」との関わりを多く持つことで、子どもをどう育てていくか、学校教育目標を軸として連携することができた。	B
情報教育	①ICT機器や学校図書館を活用し、目的に応じて情報を選ぶ力を身につけられるようにする。②情報機器の正しい使い方と情報モラルの必要性を理解した上で、適切に表現できるようにする。	①ICT機器や学校図書館を活用し、目的に応じて情報を選ぶ力を身につけられるようにする。②情報機器の正しい使い方と情報モラルの必要性を理解した上で、情報を適切に表現できるようにしてきた。また、高学年ではLINEみらい財団の方に安全なネット利用についての講演を頂戴した。	B
特別支援教育	①配慮の必要な児童の情報を共有し、組織的に支援を講じ、必要に応じて外部機関との連携を図る。個別支援計画を中心に引継ぎを行う。②特別支援教室を本校の実態に応じて計画し実践していく。③個別支援学級と交流級の担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行う。	①配慮の必要な児童の情報を全職員で共有し対応した。必要に応じてケース会議を行い外部機関に繋いだ。特別支援教室を本校の実態に応じて計画し実践した。②特別支援教室では、ファイル等を通して担当者や担任と家庭の連絡を密に行い成果をあげた。③個別支援学級担任、交流級担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行った。	B
		b10	
ブロック内評価後の気づき	浜中学校の授業参観を行い、授業の進め方や子どもたちの成長について理解を深めることができた。また、4校ブロックでの協議会では、小中での携帯電話の取り扱いの違いや欠席連絡方法についてなど各校のスタンダードについて情報交換を行った。その際に、各学校での子どもの実態を踏まえ、スタンダードを作成していることがわかり、それぞれの良さを生かして本校のスタンダードを見直すことの必要性を感じた。		
学校関係者評価	・個別級の校内宿泊体験学習は、子どもたちは貴重な体験をした。ボランティアを募るなど学生などの力を活用していくとよい。 ・地域の自然を活用した学習が次年度以降にもつなげていけるとよい。 ・保護者アンケートについて回収率をもっと上げたい。アンケート項目を変更することが肝要。保護者と子どもが対話できるような工夫や、保護者アンケートでお手伝いできるようなことを尋ねてみてでも試みてほしい。		
中期取組目標振り返り	本年度も、学校教育目標「すすんで学び 笑顔かがやく さわの里～思いや願いをもち、つながる力を育てます～」の具現化に向け、地域、保護者との連携を大切に、さらに学校運営協議会を活用しながら取り組んだ。さわの里ならではの学習材や、それに関わる人がたくさん存在すること、その教育資源を活用し、子どもの思いを大切にしながら教師が単元構想し、子どもが実際に活動する中で、豊かな体験活動が生まれ、言語能力や自分づくりの力が育まれていくことを実感してきた。今後は、課題や目指すところを一層保護者と共有し、さらに家庭との連携を強固にすることで、主体的に学び、よりよく生きる力を育てていきたい。		

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①単元等や一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをする。この学習で「何(を学ぶか)が身に付いたか」を明確にした、子ども主役の学習を目指す。②重点研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」とし生活科総合的な学習の時間を中心に、理論研修や授業研究を通じた授業改善を進める。	①様々な活動を通して、他者とのつながりを大切に、他者を尊重する態度を養う。互いに認め合うことで自尊感情を高めていけるようにする。②道徳科授業実践を保護者に伝える機会をもつ。③道徳科の諸価値について学習したことを生かすことができるよう、実生活との関連を図り、実践できるようにする。	
道徳教育	①様々な活動を通して、他者とのつながりを大切に、他者を尊重する態度を養う。互いに認め合うことで自尊感情を高めていけるようにする。②道徳科授業実践を保護者に伝える機会をもつ。③道徳科の諸価値について学習したことを生かすことができるよう、実生活との関連を図り、実践できるようにする。	①運動における自己のめあてを明確にした授業改善を行ったり、家庭と連携を取ったりして、健康への興味関心を高めるようにする。②継続して運動に取り組んでいるよう、中休みのイベントを工夫する。③正しい知識と情報に基づいて、自分で自分の食を選択できる子を目指し、食育を推進する。	
健康教育	①運動における自己のめあてを明確にした授業改善を行ったり、家庭と連携を取ったりして、健康への興味関心を高めるようにする。②継続して運動に取り組んでいるよう、中休みのイベントを工夫する。③正しい知識と情報に基づいて、自分で自分の食を選択できる子を目指し、食育を推進する。	①教科等横断的な学習を意図的・計画的に行い、「人、こと、もの」とかかわる学びを通して、よりよい人間関係を形成する力を育成する。②地域の資源を活用し、課題解決的なプロセスを通して意思決定する力を育成する。③「自分づくり・パスポート」を活用し、学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りして、自身の姿や成長を自己認知・自己評価でき	
自分づくり教育(キャリア教育)	①教科等横断的な学習を意図的・計画的に行い、「人、こと、もの」とかかわる学びを通して、よりよい人間関係を形成する力を育成する。②地域の資源を活用し、課題解決的なプロセスを通して意思決定する力を育成する。③「自分づくり・パスポート」を活用し、学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りして、自身の姿や成長を自己認知・自己評価できるようにする。	①日頃から、児童同士が適切な言葉遣いで関わり合うことができているか、児童が互いに関心をもって言葉かけをし合っているか、などに全教職員で注視し、いじめの未然防止に努めていく。②いじめが疑われる場合には、いじめ防止対策委員会を開催し迅速に対応をして解決していく。	
いじめへの対応	①5年次以下の教職員が児童の考えを生かす授業力や、児童指導の力の向上のため、中堅教員の講師の下、月1回のメンター研修を行う。②ミライム、SSD等を活用し、全職員による学校組織運営の持続可能な環境を整える。③「モデル事業」で、生み出された時間を「授業改善」「働き方改善」に活用する。	①学校運営協議会として、学校運営協議会を設置し、地域に開かれた信頼される学校づくりの実現を目指した協議を行う。②これまでの地域と連携した教育活動を、系統性と学校教育目標の実現を意識したカリキュラム・マネジメントに資する活動として捉え、継続発展させるとともに、目標やビジョンを地域と学校で共有した協働教育活動を実施する。	
地域学校協働活動	①学校教育活動の充実、運営の改善に資する協議機関として、学校運営協議会を設置し、地域に開かれた信頼される学校づくりの実現を目指した協議を行う。②これまでの地域と連携した教育活動を、系統性と学校教育目標の実現を意識したカリキュラム・マネジメントに資する活動として捉え、継続発展させるとともに、目標やビジョンを地域と学校で共有した協働教育活動を実施する。	①ICT機器や学校図書館を活用し、目的に応じて情報を選ぶ力を身につけられるようにする。②情報機器の正しい使い方と情報モラルの必要性を理解した上で、適切に表現できるようにする。	
情報教育	①ICT機器や学校図書館を活用し、目的に応じて情報を選ぶ力を身につけられるようにする。②情報機器の正しい使い方と情報モラルの必要性を理解した上で、適切に表現できるようにする。	①配慮の必要な児童の情報を共有し、組織的に支援を講じ、必要に応じて外部機関との連携を図る。個別支援計画を中心に引継ぎを行う。②特別支援教室を本校の実態に応じて計画し実践していく。③個別支援学級と交流級の担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行う。	
特別支援教育	①配慮の必要な児童の情報を共有し、組織的に支援を講じ、必要に応じて外部機関との連携を図る。個別支援計画を中心に引継ぎを行う。②特別支援教室を本校の実態に応じて計画し実践していく。③個別支援学級と交流級の担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行う。		
		c10	
ブロック内評価後の気づき	①配慮の必要な児童の情報を共有し、組織的に支援を講じ、必要に応じて外部機関との連携を図る。個別支援計画を中心に引継ぎを行う。②特別支援教室を本校の実態に応じて計画し実践していく。③個別支援学級と交流級の担任が連絡を密にとり、児童の教育的ニーズに合わせて計画的に交流学習を行う。		
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り	本年度も、学校教育目標「すすんで学び 笑顔かがやく さわの里～思いや願いをもち、つながる力を育てます～」の具現化に向け、地域、保護者との連携を大切に、さらに学校運営協議会を活用しながら取り組んだ。さわの里ならではの学習材や、それに関わる人がたくさん存在すること、その教育資源を活用し、子どもの思いを大切にしながら教師が単元構想し、子どもが実際に活動する中で、豊かな体験活動が生まれ、言語能力や自分づくりの力が育まれていくことを実感してきた。今後は、課題や目指すところを一層保護者と共有し、さらに家庭との連携を強固にすることで、主体的に学び、よりよく生きる力を育てていきたい。		